



吉野 正敏 著
新版 小気候

地人書館, 1986年10月刊
298頁, 3,600円

新刊紹介にはちょっと遅くなってしまったが、昨年10月、筑波大学吉野正敏教授による「新版 小気候」が地人書館より出版された。本書は、1961年に刊行されたその前身の「小気候——局地気象学序説——」と同じく、「小気候」を書名にしているの、改訂版ともみられるが、まえがきにあるように旧版の3部構成、付録を全面的に改めた、正しく新版小気候であるといえよう。旧版では、第1部「序説」、第2部「小気候の区分」、第3部「小気候の影響」と付録としてあった「小気候調査法等」であったが、新版では、内容的には旧版の第1部と第2部のみにして、最近の多岐にわたる分野の研究成果を、写真、図版を豊富に使って紹介したものである。

新版の構成は次のような6章からなっている。

1. 小気候と微気候
2. 小地域の気候の調査研究史
3. 小地域の地表状態と気候
4. 小地域の地形と気候
5. 局地気象と小気候
6. 小気候による地域区分

1, 2章では小気候、微気候の定義、考え方から始まって、気候の調査研究史を地形毎に、また国毎に紹介している。3, 4章では地表状態として平坦地、都市、林地、海岸・湖岸・河岸を、地形として山岳、丘陵・盆地・谷間・山麓といったように、対象とする地域を細分化し、それぞれについての気象要素の観測例を豊富な図

版で括めている。5章は著者のもっとも力を入れた章であり、またもっとも得意なところでもあろう。特に5.3局地風と、5.4夜間の冷氣の形成と流出は、その内容の豊富さから、現象が生々として、実際に現場で観測をしているような気分になり、臨場感が伝わってくる。6章は地域区分の方法について述べたものである。これらの構成によって、旧版の第1, 2部で200ページであった内容が、新版では300ページにもなっているのである。

著者が、この本で扱った内容は、確かに小気候といわれる分野であろう。しかし、最近の気象学、大気物理学における対象が、現象としても、スケールとしても境界領域が輻蕩しているのが事実であるから、この本は単に地理学や気候学を研究し、勉強する人ばかりではなく、広く総観気象や大気境界層の分野はもちろん、雲物理学等をその主たる研究分野にしている方々にも大いに参考になるし、読んでもらいたいと思うのである。前にも述べたように、写真、図版が多いので、それだけ見ているのも大変楽しくなるし、参考文献が多いのも大変役に立つであろう。

著者が巻頭に引用した

東岸西岸の柳 遅速同じからず
南枝北枝の梅 開落己に異なり

は、正にこの本の使い方も表わしているのではないだろうか。

研究分野の異なる私が、あえてこの本の書評を書いたのもここにあるのである。

ただ、著者が考えている気候のスケールからいっても、またここに取り扱ったスケールからいっても、書名は「小・中気候」といった方がよかったのではないだろうか。

(北大理学部 菊地勝弘)



加藤進会員アップルトン賞を受賞

京大超高層電波研究センターの加藤 進会員が、この度、英国王立協会から、アップルトン賞を受賞しました。この賞は、ノーベル物理学賞を受賞したエドワード・ビクター・アップルトン卿を記念し、電離層や大気の研究者に送られるもので、日本人の受賞者は初めてです。信楽のMUレーダー建設等の業績が評価されたもの

といえます。

加藤 進会員は、「さらに、日本主導の国際協力プロジェクトとして、インドネシアに、MUレーダーの10倍もの大型赤道レーダーを建設したい」と意気さかんところ です。